

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Applications of cognitive linguistics to English education in Japan : toward the comparison of Japanese and English vocabularies

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村田, 純一 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/664 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



認知言語学の英語教育への応用 (日英語比較へ向けて)

村 田 純 一

0. はじめに

学問分野として認知言語学が確立してから、すでに20年ほどになるが、日本の英語教育への影響はいかほどのものであろうか。本論文は認知言語学の日本の英語教育への応用について、その現状と今後の可能性を探る事を目的とする。手順として、まず第一に認知言語学の定義を見たとうえで、英語教育に应用可能な認知言語学特有のいくつかの概念について簡単に紹介する。そして、応用の効果に関する実証研究例を見ていく。最後に、今後さらに期待される応用例のいくつかを提案しながら日英語比較の新基軸を探る。

1. 認知言語学とは

『改訂版 英語教育用語辞典』は認知言語学を以下のように説明している。

言語は、認知が統合的に関わりあってできている現象であると捉え、言語のあらゆる現象を意味の面から捉えようとする言語理論。G. Lakoff や R.W. Langacker らが中心になって、1980年代後半からこの理論を枠組みとした研究が盛んに行われるようになった。1960年代半ばから70年半ばまで続いた生成意味論 (generative semantics) にこの理論の始まりがあったとされる。

認知言語学理論の特徴は、形式 (form) に重点が置かれていないという点にある。文や語の意味はそれが使用されている文脈／コンテキストによっ

て決まるのであり、そういった文脈を除いて考えることは不可能であると見なされる。つまり、文や語は、それ自体に独立した意味があるわけではない。したがって、認知言語学では、言語能力を他の認知能力から独立してはいないものとみなし、意味と語用の間や、言語知識と言語外の知識の間に境界線を引かない。この点で生成文法 (generative grammar) や関連性理論 (relevance theory) とは大きく立場が異なる。(以下省略)

この定義で特に注目すべき事は、認知言語学が、生成文法とは異なり文脈中心であり、意味を重視することにある。生成文法は英語教育にはほとんど影響がなかったと思われるのに対して、認知言語学の英語教育への応用が期待されるのはまさしくこの点にあると言えよう。

2. 認知言語学の諸概念

ここでは認知言語学のいくつかの概念について、河上 (1996) や Dirven, R. and Verspoor, M. (2004)などを参照して、ごく簡単にまとめていく。

iconicity (図像性, 類像性, 類似記号性): 記号における形式と意味の対応のことで、たとえば、出来事が起こった順序で、言語化されることなどがあげられる。

prototype (原型): あるカテゴリーのメンバーは様々に異なり、best examples を prototype と呼ぶ。たとえば、fruit の prototypes は apples や oranges で watermelon ではない。世界には客観的な categories はなく、人間が世界に categories を impose して、それは、時、場所、コンテキストで変化する。

conceptual metaphor (概念的メタファー): ある概念に関する一連の表現全体をまとめ、支配するようなメタファー ARGUMENT IS WAR, ANGER IS FIRE, LIFE IS A JOURNEY などがある。

construal (解釈, 捉え方) : 認知文法の中心概念で, 話者の捉え方によって表現が異なることが起こる。たとえば, *a group of stars* 「星の集まり」を *a constellation* 「星座」, *a cluster of stars* 「星の一群」, *specks of light in the sky* 「空の中の光の斑点」など様々に捉えることができる。あるいは, 容器に半分入った状態を *half full* と表現するか, *half empty* と表現するかは捉え方次第である。

image-schema (イメージ・スキーマ/認知図式) : 図式化された抽象的な表象のことで, 容器のスキーマなどに代表される。

その他として **basic-level terms, construction, usage based, grammaticalization** などをあげることができる。

3. 認知言語学の特徴と教育への応用

2においても簡単に述べたが, Ungerer and Schmid (1996:273) は認知言語学の教育文法や言語教育への貢献について以下のように述べている。

“The liberation from the form/content division is probably the most important contribution that cognitive linguistics has made to pedagogical grammar and language teaching.”

意味と形式の分離からの解放, すなわち, 文法形式とそれが表す意味との間や語彙形式とそれがあらわす意味との間には, 恣意的関係しかなく, その結びつきは暗記や練習で覚えるしかない信じられてきたが, 実はその間には必然的な関係があるという考え方である。もしこれが本当だとすると, 英語は暗記科目であるとされてきた一般常識を覆し, 学習者にとってどれほど負担が減るか計り知れないことになる。

以下では認知言語学による英語教育への応用を具体的な例をもとに見ていく事にする。

3.1 認知言語学による説明

1) コアの意味と意味の拡張 (Core senses and meaning extensions)

カテゴリーに様々なメンバーが存在するのと同様に、語にも様々な意味があり、中心的な意味をコアの意味と呼び、それから他の意味が生み出されると考える。意味拡張の基本的な2つの原理は **metaphor** (隠喩) と **metonymy** (換喩) で、前者は異なる領域の経験の間に感じられる連想による。たとえば **heart** が「心臓」から「心」、「中心」、「ハートマーク」、**clear** が「すきとって見える」から「(物事が) 明白な」などに拡張する。後者の **metonymy** (換喩) は同じ領域内の隣接、近接関係から意味の拡張が起こる。たとえば、**orange** が「果物のオレンジ」から「オレンジ色」、**hammer** が「ハンマー」から「ハンマーで打つ」**paint** が「塗料」「塗料を塗る」などである。この二つの原理に加え、**synecdoche** は類から種 (**drink** が「飲む」から「酒を飲む」)、種から類 (**ship** が「船で荷を送る」から「荷を送る」) などのように、上位概念と下位概念との間の意味変化と言える。

2) conceptual metaphor (概念的メタファー)

以下のように、すべて大文字で表された概念的メタファーを想定することにより、その下の具体的なイディオム表現などが無理なく理解することができる。このような概念メタファーは数多く想定することができる。

ARGUMENT IS WAR

Your claims are indefensible.

He attacked every weak point in my argument.

I demolished his argument.

ANGER IS A HOT FLUID IN A CONTAINER

I was boiling with anger.

She was all steamed up.

She erupted.

3) construal (捉え方)

認知文法では、定冠詞と不定冠詞の用法や可算名詞と不可算名詞の違い、さらに能動態と受動態の違いを話し手（書き手）の捉え方によって説明する。

話し手が、the ～と言う場合は、聞き手が～とは、どの～かを分っていると、話し手が判断する（捉える）場合である。

Give me the pen. / Give me a pen.

同じ名詞でも可算と不可算の両方が可能な場合は、話し手がどちらに判断する（捉える）かによって異なる。例えば、おなじ sleep でも、始まりと終わりがはっきりして境界のある出来事と捉えれば可算、より拡散した境界のないものと捉える場合は不可算となる。

I had a good sleep. / I need sleep.

He needs an education. / Children need access to education.

受動態か能動態かは、どちらの視点から捉えるかによる。

The ball broke the window. / The window was broken.

4) usage-based model (用法基盤モデル)

文法の習得とは実際のコンテキストの中の具体例をもとにして、発達していくという考え方で、チョムスキーの生得主義と対立するが、教育現場での学習文法と一致する部分が大いと言える。

5) construction grammar (構文文法)

構文に意味があるという考え方。従来の解釈では例えば、S+V+O₁+O₂とS+V+O₂+to+O₁は同義として、以下のように、意味を変えずに、書き換え可能とされてきた。

He sent the letter to her but she didn't get it.

He sent her the letter but she didn't get it.

しかしながら、構文の違いは意味の違いを表すので、上の文は自然であるのに対して、下の文は前半部分で、手紙が彼女に届いたことを含意するの

で、やや不自然な文であるとされる。

6) grammaticalization (文法化)

もともと内容語だったものが、歴史的な意味変化を受けて、次第に機能語としての文法的な性質、役割を担う現象で、語義・語形・語音において「意味の漂白」(semantic bleaching), 「脱範疇化」(deategorization) などが起こる。例としては、「そこに」という意味を失って存在文の文頭に置れる **there** や、「行く」という意味を失い、未来時制を表す **be going to ~** などがある。

以上のように、認知言語学の英語教育への応用の具体例を見てきたが、実際の教育の現場ではこのような応用はどの程度行われているのであろうか。

実のところ、イメージ・スキーマとはほぼ同じものと考えられるイメージや図、絵などの利用は、一般の参考書や辞書や、中・高の教室でも既に古くから行われてきていることである。たとえば、同じ前置詞が多様な意味を持つことを説明するために、イメージや絵はその分りやすさ故に利用されてきたが、認知言語学によって、それらが理論的根拠を得たと言える。

また、早くから認知意味論の応用面に注目し、コアの意味からの多義性については、動詞については田中(1987)などからすでに知られている。しかしながら、それが現場の教育に直接の影響を与えたかどうかは明らかではない。

多義語一般についてメタファーやメトニミーの理論的なメカニズムを解明した上で、1,427語の基本語について、詳しい説明を加えているのが、『多義ネットワーク辞典』である。おそらくこの辞典は多義語に関する辞書としては最高峰であろうが、一般の学習者向けではなく、教員や研究者向けで、教育現場で教員がこの辞書の情報を生徒にわかりやすく説明するのに適していると言えそうだ。

3.2 教育への応用の効果に関する実験的証拠

以上のように、認知言語学の、(もしくは、認知言語学的な)英語教育への応用は古くから行われてきているが、本当に効果はあるかどうかについての実験的な研究は、最近になって盛んになっているようだ。以下に主なものを簡単に見ていく。

1) 多義語の習得：コアの意味から比喩的意味の推測

Verspoor and Lowie (2003) は多義語の場合、コアの意味を最初に与えると、抽象的、比喩的な意味が、推測しやすく、また、よりよく保持されると論じている。この実験はオランダ人の英語学習者を二つのグループに分け、第1グループにはコアの意味を含む文(S1)と、比喩的な意味を含む文(S2)を与え、与えられたコアの意味から、比喩的な意味を推測させた。第2グループは、コアではなく別の比喩的な意味を含む文(S3)から、比喩的な意味を含む文(S2)の意味を推測させた。その結果、第1グループが、推測の結果が優れていた。また、両グループに正解を与えた後のテストではほぼ同じ正解率であるのに対し、2, 3週間後のテストでは第1グループが有意に優れた結果となった。

2) 句動詞の方向メタファー

Yasuda (2010) は“up”や“down”などの副詞不変化詞に組み込まれている orientational metaphor (方向を表すメタファー) への意識を高めることが、句動詞の習得を促進することを確かめた。115人の日本人大学生を等質の2グループに分け、統制群には伝統的な指導法すなわち、21の句動詞を日本語に訳し、それを記憶するように指示をした。実験群は認知言語学的アプローチ、すなわち、同じ句動詞を単に訳すだけでなく、副詞不変化詞に組み込まれている方向を表すメタファーが、句動詞の意味にどのように関わるかを強調して指導した。以上の指導と記憶をさせる合計10分間の後に、上で記憶させた句動詞15を含む30の文(ただし、副詞の部分が空白になっている)を与え、副詞を入れさせるタスクを課した。その結果は記憶さ

せた句動詞については差がなかったのに対して、初めての句動詞に関しては実験群が有意を持って優れていた。このことは実験群の認知的アプローチが優れている事を示している。

中川 (2011) は同じく句動詞 (carry out, point out, find out, come out …など) の習得におけるイメージ・スキーマの有効性について実験を行い、その効果を確かめている。

3) 前置詞の習得

後藤 (2007), 安原 (2010), はイメージ・スキーマとコア・イメージの有効性を確かめるための実験をいくつか行い、ある程度、効果があることを報告している。

4) 可算・不可算名詞

Cho and Kawase (2011) は中学と高校の授業で可算・不可算名詞を認知言語学的なアプローチで教えたところ、伝統的な教え方と比べ、有意差のある効果を確かめ、さらに教員研修において、このアプローチが無理なく実践できるものとして、すべての教員から支持されたことを報告している。

5) 冠 詞

Huong (2005) は冠詞学習について、認知言語学的アプローチと機能的アプローチとを比べ、短期的には効果が見られたものの、長期的には効果が薄れたと報告している。

6) 法助動詞

Tyler (2008) は英語の上級者にとっても困難とされる法助動詞について、認知言語学的アプローチが効果をあげた事を報告している。

4. 更なる応用への展望

以上のように認知言語学のこれまでの利用とその効果の実証的研究例を概観してきた。以下ではこれまで取り上げられて来なかった応用についていくつか考えてみたい。特に、後半では日英語の比較研究の視点からの提案をす

る。

4.1 メトニミー、メタファーによる意義拡張の利用

多義語を扱う場合、メトニミーやメタファー（あるいはシネクドキーを含む場合もある）による語義の関連性を説明して教える場合と何も教えずに多義語の意味を覚えさせる方法の比較が考えられる。その際、メトニミーやメタファーなどの専門語を導入するかどうかは議論がわかれるであろう。以下ではさらにメトニミーとメタファーに分けて考える。

4.1.1 メトニミー

3.2で検討した認知言語学の応用は主にメタファーの場合であったが、メトニミーの応用も考えられる。たとえば、以下のように、道具からプロセスの例、すなわち、道具を表す名詞からそれを用いて行う行為を表す動詞に変換することを示し、他の例もそれから類推してどれほど意味が分るかを実証研究することが考えられる。

例：a hammer → He hammered a nail into the wall.

（金槌 [名詞] → 金槌で打つ [動詞]）

他の例：

1. He drilled a hole.
2. He pinned the badge to the cap.
3. He taped the message on the door.
4. He clipped the papers together.

このように、メトニミーによる変換すなわち名詞から動詞あるいは動詞から名詞など、同形の単語を別の品詞で用いることは、意味拡張の一種で、英語では非常に多い現象で、英語習得の上では重要なことであるが、同形であるため、語彙を増やしたことが明瞭ではないため、これまで重要視されて来な

かったのかも知れない。¹

4.1.2 メタファー

3.2で見たようにメタファーの意味拡張に関して、コアの意味の重要性や、特に方向を表す概念的メタファーの効果など、ある程度実証されているが、もっと単純に、メタファーの意味拡張の例を示して、それぞれの語義をどれほど類推できるかを確かめることが考えられる。たとえば、意味拡張についてのメタファーの原理を示したのち、bond, line など英語の多義語について、それぞれの語義の用例を示し、その意味をどれほど理解できるかを試すことである。もし、これが効果があるとすれば、語彙指導において大きな意味をもつことになるだろう。²

メタファーに関しては、さらに英語の conceptual metaphors を教える事で、個々のメタファー（イディオム）の理解が促進されるかについても実証する必要があるだろう。³

4.1.3 多義語（多品詞語）の重要性

ここで、忘れてならない点として、語彙指導における語義拡張の重要性を明らかにする必要性である。上でも少し述べたが、語義拡張はあくまで同形語のため、語彙数が増えたという感覚がないせいかなり重要視されて来なかったのではないだろうか。これについては、教育上の重要性の観点から、研究が必要だろう。たとえば、多品詞語を含む多義語のそれぞれの意味の、コーパスにおける出現率。あるいは基本語数千の中で、多義語がどのような比率になっているかを確かめる必要があるだろう。

また、これは以下で検討する日本語との比較によってさらに英語の多義語の重要性が明らかになると思われる。

4.2 英語の意味拡張と日本語の意味拡張の相違点について

認知言語学的アプローチが英語の語彙の習得にどれほど効果があるかを確かめる方法を提案してきたが、以下では、認知言語学的視点から、英語の意味拡張と日本語の意味拡張の相違点に着目し、英語の多義性の重要性を明らかにしたい。また、このことを教育の場に取り入れることは、言語意識 (language awareness)、あるいは村田 (1996) で論じたようなメタ言語能力の促進を果たすことが期待できる。そしてそれは、文化の比較につながる可能性が高く、これは、従来から唱えられてきた、外国語教育の目的である、言語や文化に対する理解を深めることであり、認知言語学の教育的意義の高い応用と言えるかも知れない。⁴

では英語の意味拡張と日本語の意味拡張の相違点とは具体的にどのようなものを挙げられるだろうか。これは品詞レベルと単語レベルで分けて考えることができるだろう。

4.2.1 品詞レベル (転換)

瀬戸 (2007) によると英語では、以下のように、メトニミーの働きで名詞から動詞、動詞から名詞など他品詞への意味の拡張、あるいは、他動詞から自動詞、自動詞から他動詞への意味拡張が起こる。

名詞から動詞 (たとえば、道具でプロセス) saw, paint など

動詞から名詞 (たとえば、プロセスで道具) wrap など

他動詞から自動詞 (原因で結果) heal (治す → 治る) など

自動詞から他動詞 (結果で原因) thaw (解ける → 解かす) など

さて、以上のような英語の品詞の拡張は「転換 (conversion)」としても古くから研究されてきている (Marchand, 1960)。一方、日本語ではどうだろうか。以下の例のように、英語では同じ単語が、日本語では自動詞と他

動詞は別の形になるのが普通のようなのである。

I started the lecture. (私は講義を始めた。)

The lecture started. (講義が始まった。)

類例を日本語の対応語と共に以下に示す。

| 英 語 | 日本語 | 英 語 | 日本語 |
|-------------|----------|-----------|-----------|
| begin/start | 始まる, 始める | change | 変わる, 変える |
| end | 終わる, 終える | turn | 回る, 回す |
| stop | 止まる, 止める | return | もどる, もどす |
| close/shut | 閉まる, 閉める | melt/thaw | 解ける, 解かす |
| open | 開く, 開ける | freeze | 凍る, 凍らせる |
| break | 壊れる, 壊す | hurt | 傷つく, 傷つける |
| sit | 座る, 座らせる | stand | 立つ, 立たせる |
| drop | 落ちる, 落とす | heal | 治る, 治す |

ところが、森田 (2002) によると、日本語でも自動詞と他動詞が同形である動詞が以下のように多数存在するとしている。

「あける, 唸る, 下ろす, 負う, 折り返す, 送る, 利く, 組む, 繰り出す, 越す, さす, さし込む, 渋る, する, 迫る, 備える, 垂れる, 付く, 突っ込む, 募る, 詰める, 吊る, 手伝う, 閉じる, 伴う, 濁る, 覗く, 運ぶ, 弾む, はだけの, 働く, はねる, 張る, 引く, 引き上げる, 開く, 控える, 吹く, 吹きつける, 吹き込む, 塞ぐ, ふるう, ふるまう, 触れる, 巻く, 負ける, 増す, 間違う, 見合う, 見直す, 結ぶ, 持つ, 休む, 病む, 寄せる, 割る, 催す」

しかしながら、これらを良く調べてみると、上で見た英語とは異なり、いわゆる能格動詞 (自動詞文の主語と他動詞文の目的語が同一である動詞) と言えるものは「開く, 閉じる, 増す」などのごく少数にとどまると思われる。

また、動詞と名詞あるいは他の品詞への転換についても、日本語に見られない特徴と言える。並木（2009:12）も「品詞転換は英語においては種類も例も非常に多い。一方日本語においては英語ほど種類も例も多くないと思われる」としており、動詞の連用形を名詞として使われる場合（例：「遊ぶ」→「遊び」, 「泳ぐ」→「泳ぎ」）の他, 「心持ち」や「いきおい」が名詞と副詞として使われる例を挙げているのみである。以上の事実は意外にも指摘されて来なかったようである。

ではここで少し踏み込んで、品詞転換が英語では多く、日本語では少ない理由を考えてみたい。自動詞と他動詞の転換はおそらく、英語が主語と目的語を省略することが日本語に比べ非常に少ないことと関係しているのではないだろうか。たとえば、ある男性のことを話題にした会話で、英語で 'He has changed.' は日本語では「(彼は) 変わったね。」となり、さらに、その男性の髪型などを話題にした時に、'He has changed it.' 「(彼はそれを) 変えたね」と言える。英語では同じ **change** でも自動詞か他動詞かが主語や目的語を言い表すので、誤解が起きないが、日本語は主語や目的語を省略することがむしろ普通なので、同じ形の動詞では自他の違いが言い表せないため、自動詞と他動詞が別の形になっていると考えられる。このことはさらに多品詞語の有無についての説明にも適用できるのではないだろうか。

4.2.2 個々の単語レベル

単語レベルの意味拡張において、英語と日本語ではどのような共通点あるいは相違点があるだろうか。上で述べたことからすると、英語の方が多義性が優位ではないかと推測される。

比較的意味拡張をしやすい身体の部位について、国語辞典（レジタル大辞泉）と英和辞典（ランダムハウス英和大辞典）で比較してみると、添付資料の「頭」'head' と「顔」'face' を見る限りでは英語が圧倒的に語義が多くなっている。これは、英語が動詞などへの他品詞への意味拡張があることが一つ

の原因である。ところが、以下のように日英共通語義、英語のみの語義、日本語のみの語義を比較すると、英語に無くて日本語にある語義もみられる。日本語と比べ英語の多義性における優位については即断できないように、稿を改めて論じる必要があるだろう。

名詞に限定した場合の比較

| | 日英共通の語義の例 | 英語のみの語義の例 | 日本語のみの語義の例 |
|------------|-----------------------|-------------------------------------|-----------------------|
| 頭／ head | 頭，頭脳 | 水源，（湾・湖の）奥泡，山場，岬，要点，硬貨の表，キャベツなどの玉，命 | 相場の最高点 物事の始め，うあまえ |
| 顔／ face | 顔，表情，有名人，体面 | 前面，額面，書体，仮面 | 代表 |
| 目／ eye | 目，視力，目つき，洞察力，針の目／台風の目 | イモのメ，標的の中心，探偵，留意，意図 | 外観，碁盤の目，網の目，木目，櫛の目，体験 |
| 手／ hand | 手，労力，所有，権力，持ち駒，持ち札 | 時計の針，専門家，一勝負，一番 | 取っ手，火の手，手数，技 |

ところで、そもそも語義の分類については、慎重な扱いが必要である。上のように、英語と日本語のそれぞれの対応語の語義を対照させる場合に、例えば head「頭」と 'head' は以下のように概略的に図示することができる。

左右が同じ位置の部分が同義ということを表し、対応する意味がない場合は空白になっている。

| | |
|-----------------|-----------|
| | 頭（うあまえ） |
| | 頭（相場の最高点） |
| | 頭（物事の初め） |
| head (brain) | 頭（頭脳） |
| head (体の一部) | 頭（体の一部） |
| head (キャベツなどの玉) | |
| head (硬貨の表) | |
| head (水源) | |

英語と日本語で対応する部分としない部分がよくわかり、語義の拡張の違いがわかりやすい。これをそれぞれ一方の単語からみた場合を図示すると以下のようなになるだろう。

| | |
|------|----------|
| head | 頭 |
| | キャベツなどの玉 |
| | 硬貨の表 |
| | 水源 |

| | |
|----------|---|
| head | 頭 |
| start | |
| top | |
| rake-off | |

では以下の場合はどうだろうか。

| | |
|------|----|
| rice | 稲 |
| | 米 |
| | ご飯 |

| | |
|---------------------|-------|
| brother (sister) | 兄 (姉) |
| | 弟 (妹) |

| | |
|----|----|
| be | いる |
| | ある |

| | |
|------|-------|
| give | 与える |
| | あげる |
| | やる |
| | 差し上げる |

| | |
|-------|----|
| break | 壊す |
| | 破る |
| | 切る |
| | 折る |

| | |
|-----------|----|
| high | 高い |
| tall | |
| expensive | |

| | |
|-------|----|
| low | 低い |
| short | |
| cheap | |

| | |
|--------|----|
| large | 広い |
| narrow | |

| | |
|--------|----|
| small | 狭い |
| narrow | |

これらは、英語一語に日本語がいくつか対応しているものとその逆の例であるが、これを一語の方の単語の語義が拡張していると言えるだろうか。英英辞書の中には break の目的語あるいは主語が bone や skin の場合に他の目的語とは語義を別扱いにする辞書と同じ扱いにする辞書がある。別扱いとはメタファーのはたらきによる語義の拡張と考えられる。そうすると日本語の「いる」「ある」の違いを be 一語で表す英語も、同様に意味の拡張と言えるかもしれない。

別の考え方も当然あるだろう。コアの意味をもともと広く捉えることで、語義の拡張と扱わないこととする。すなわち、英語では生物も無生物も「存在する」は be で表し、give や get や break についても同様に主語や目的語

の違いに関わらず、コアの意味を広くとることで、意味拡張ではなく、日本語との差が最初から存在すると解釈する。

いずれにしても、認知言語学の意義の拡張の理論は日英語の対照研究において、大きな影響を与えると行って間違いのないだろう。

4.2.3 日本語と英語の概念メタファーの比較

日本語の概念メタファーの多くは英語と一致する。たとえば、**TIME IS MONEY** に対して、「時は金なり」という、ことわざが対応するように、「時を費やす」、「時間を節約」などの表現が存在している。時の方向性についても村田（1985）にあるように日英でほぼ一致していると言える。さらに、**up** と **down** に表される方向性一般のメタファーにもかなりの共通点が見られる。

一方、日米で微妙に、あるいは、大きく異なる場合も存在する。たとえば、日本語では「スポーツの試合は戦いである」という概念メタファーがあるようだ。したがって、たとえば、野球などの試合を「戦い」と表し、「初戦」、相手を「敵」、自分の側のメンバーを「味方」、などの表現があるが、英語では **fight** はボクシングなどの格闘技に限られるようだ。日本に於ける団体スポーツ競技一般のランニングの練習時に掛け声として使われる「ファイト」やエールの交換時の「ファイト」は英米では一般的ではないようだ。

もっと一般的に、ことわざや、四文字熟語の多くは一種のメタファーと言えるだろう。たとえば「年功序列」は四文字熟語であるが、日本のメタファーと言えるであろうか。先輩、後輩などの区別は英語ではあまり意識されないとも言われているがはたしてどうだろうか。

このように、日本語と英語の違いをメタファーを通して理解することは興味深い。すでに鍋島（2011）で日本語のメタファーについて詳しく検討されており、概念メタファーの比較が言語の比較にとどまらず文化の比較に通じることから、この分野の研究の発達が大きいと期待される。

5. おわりに

本論では、認知言語学の英語教育への応用についてこれまでの例を概観し、さらなる応用可能性について、いくつか具体的な提案をしてみた。その提案の中にはメトニミーなど、既に実際行われているものもあり効果が報告されている (Kamiya 2012)。残りの提案についても今後検証する予定であり、その効果について報告するつもりである。また、提案と同時に、特に英語と日本語の比較では、いくつかの疑問が浮かび上がってきた。これらについても今後の研究テーマとして考察を深めていきたい。

最後の付け加えることとして、現場の語彙指導のあり方がある。現場では語彙指導を独立させることが少ないため、本論で提案した方法も実は、授業の中では実施しにくいというのが、実情かもしれない。この点については別の機会に論じたい。

注

注1 それに対し、接辞をつけて、別品詞にすることは従来から注目されてきている。ただし、その場合、名詞から動詞、動詞から名詞の拡張では、上と異なり、*beautify*, *signify*, *encourage*, *strengthen*, *lengthen*: *realization*, *materialization*, *entertainment*, *assurance*, など、抽象性が高いと言えそうである。

注2 村田 (1990) で論じたように、*conceptual metaphor* の一つである *container metaphor* は *in* の指導の際に、*in* 自体の意味ではなく、後続する名詞自体を容器として捉えることで *in* の用法の理解が深まる。

注3 さらに、メタファーの代表例を示して、類例で、意味がどれほど類推できるかを確かめることが考えられる。たとえば、*foot* のメタファーの例として、*at the foot of the mountain* を示し、*at the foot of the tower/building/stairs/bed* を正しく理解できるかを確かめることである。ただしこれは意外に困難が予想される。つまり、理解を確かめる際に日本語訳で確かめるか、単に場所を特定できるかどうかで確かめるかなどの問題がある。

注4 文科省の学習指導要領の中学の英語科の目標は「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」である。

引用文献

Cho, K. and Kawase, Y. (2011) Effects of a Cognitive Linguistic Approach to Teaching Countable and Uncountable English Nouns to Japanese Learners of English. *ARELE*.

- Dirven, R. and Verspoor, M. (2004) *Cognitive Exploration of language and Linguistics Second Revised Edition*. John Benjamins Publishing Company.
- 後藤由佳 (2007) 「コア・イメージの視覚化が語彙習得に与える効果」 *Otsuma review* 40, 237-248.
- Huong Nguyen Thu (2005) *Vietnamese Learners Mastering English Articles*, Unpublished PhD dissertation, University of Groningen.
- Kamiya (2012) *An application of Cognitive Linguistics to English vocabulary teaching*, Unpublished MA thesis. Kobe City University of Foreign Studies.
- 河上道生・政村秀實 (1989) 『図解英語基本語辞典』 桐原書店。
- 河上誓作 編 (1996) 『認知言語学の基礎』 研究社出版。
- Marchand, H. (1960) *The categories and types of present-day English word-formation: a synchronic-diachronic approach*.
- 鍋島弘治朗 (2011) 「日本語のメタファー」 くろしお出版。
- 中川右也 (2011) 「句動詞習得におけるイメージ・スキーマの有効性—認知的視点から—」 第37回全国英語教育学会山形研究大会発表予稿集, 70-71.
- 竝木崇康 (2009) 単語の構造の秘密—日英語の造語法を探る (開拓社言語・文化選書) 開拓社。
- 村田純一 (1996) 「メタ言語能力と外国語教育」 神戸外大論叢 第47巻。
- (1990) 「[in/out of +感情を表す名詞]の語法について」 『語法研究と英語教育』 12号 山口書店。
- (1984) 「日英語における時のメタファー」 『筑波英語教育』 第5号。
- 森田良行 (2002) 『日本語文法の発想』 ひつじ書房。
- Robinson, P and Ellis, N. (eds) (2008) *Handbook of Cognitive Linguistics and Second Language Acquisition* Routledge.
- 瀬戸賢一編 (2007) 「英語多義ネットワーク辞典」 小学館。
- 白畑他編 (2009) 『改訂版 英語教育用語辞典』 大修館書店。
- 田中茂範 (1990) 『認知意味論 英語動詞の多義の構造』 東京：三友社出版。
- Tyler, A. (2008) *Cognitive linguistics and second language instruction* in Robinson, P and Ellis, N. (eds) *Handbook of Cognitive Linguistics and Second Language Acquisition* Routledge.
- Ungerer, F. and Schmid, H.-J. (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics*. London: Longman.
- Verspoor, M. (2008) *Cognitive linguistics and its applications to second language Teaching* in J. Cenoz and N.H. Hornberger (eds) *Encyclopedia of Language and Education, 2nd Edition. Volume 6: Knowledge about Language*. 79-91.
- Verspoor, M. and Lowie, W (2003) 'Making sense of polysemous words', *Language Learning* 53, 547-587.
- Yasuda, S. (2010) *Learning Phrasal Verbs Through Conceptual Metaphors: A Case of Japanese EFL learners. TESOL QUARTERLY Vol.44, No.2*.
- 安原千尋 (2010) 「前置詞学習における認知意味論的指導の一考察(2) —前置詞 at, in, on に焦点を当てて—」 第36回全国英語教育学会大阪研究大会発表予稿集, 402-403.

資 料

あたま【頭】

- 動物の体の上端または前端の部分で、脳や目・耳・鼻などの重要な感覚器官のある部分。
⑦首から上の部分。かしら。こうべ。「一を深く下げる」

- 人間では、頭髮の生えた部分。動物では頭頂のあたり。「一をかく」「犬の一をなでてやる」
- 脳の働き。思考力。考え。「一の回転が速い」「一に入れておく」「一を切り替える」
- 髪。頭髮。髪。形。「一が白くなる」「一を刈る」
- 物の先端、上端。てっぺん。「釘の一」
- 物事のはじめ。最初。はな。「来月の一から始める」
- うまえ。「一をはねる」
- 主だった人。人の上に立つ者。首領。長。かしら。「一に据える」
- 人数。頭かず。「一がそろろう」
- (「ひとり」の下に付き、接尾語的に用いて)人を単位とすることを表す。…あたり。「ひとり一十円を集める」
- 相場の最高点。天井。「一つかえ」
- 「頭金(あたまきん)」の略。

下接語 穂粟(いがぐり)頭・石頭・大頭・金槌(かなづち)頭・金柑(きんか)頭・慈姑(くわい)頭・芥子(けし)頭・外法(げほう)頭・孔子頭・才槌(さいづち)頭・散切(さんき)頭・白髪頭・播(す)り粉木頭・茶瓶(ちゃびん)頭・禿(はげ)頭・ビリケン頭・坊主頭・本多頭・薬頭(やくん)頭・野郎頭

- 頭(あたま)が上がる□ない
- 頭(あたま)が痛(いた)い
- 頭(あたま)が重(おも)い
- 頭(あたま)が固(かた)い
- 頭(あたま)が切(き)れる
- 頭(あたま)隠(かく)して尻(しり)隠(かく)さず
- 頭(あたま)が下(くだ)がる
- 頭(あたま)が低(ひ)い
- 頭(あたま)が古(ふる)い
- 頭(あたま)から水を浴(あ)びたよう
- 頭(あたま)から湯気(ゆげ)を立てる
- 頭(あたま)剃(そ)るより心を剃(そ)れ
- 頭(あたま)でっかち尻(しり)すりばり
- 頭(あたま)と尻尾(しっぽ)は呉(く)れてやれ
- 頭(あたま)に入(い)れ
- 頭(あたま)に□来る
- 頭(あたま)に血(ち)が上(あ)がる
- 頭(あたま)の上(うへ)の蠅(はえ)を追(お)う
- 頭(あたま)の黒(くろ)い鼠(ねずみ)
- 頭(あたま)まさきまで
- 頭(あたま)の中(なか)が白(しろ)くなる
- 頭(あたま)を上(あ)げる
- 頭(あたま)を痛(いた)める
- 頭(あたま)を抱(かか)える
- 頭(あたま)を撞(か)く
- 頭(あたま)を下(くだ)げる
- 頭(あたま)を搾(しぼ)る
- 頭(あたま)を突(つ)込(こ)む
- 頭(あたま)を悩(なや)ます
- 頭(あたま)を撥(は)く

【デジタル大辞泉】 小学館

head [héd] =

- n. —n.
- 1 (1) (人の) 頭、頭部。
▶首から上を指すので、「顔」「首」と訳すことも多い。=
(2) (動物の) 頭、頭部；〔競馬〕(馬の) 頭1つ分の着差、頭差；=
2 (知力の中心としての) 頭、頭腦、知力、理性、理解力、想像力；才能；正気、分別、冷静さ、落ち着き；=
3 生命、命；=
4 (1) 指導的〔権威ある、名譽ある〕地位、首席；上席；主人席、座長席；=
(2) 長、会〔社、部、団、校、家〕長、かしら、首領、盟主、リーダー、〔米〕(各省の) 長官、学部長；(the H—) (話) 校長 (cf. HEADMASTER, HEADMISTRESS)；=
(3) (the head) (家) お偉がた。
5 (能力・気質・地位などを表す語と共に用いて) 人；=
6 (1) (物の) 頭、頭部；(ページなどの) 上部；(丘などの) 頂上、頂；(樽(たる)などの) 蓋(ふた)〔頭、鏡〕。
(2) (ドラムなど打楽器の) 皮面；(弦楽器の) 頭の部分。
(3) (ベッド・墓などの) 頭の位置；=
(4) 頭に似た〔似せた〕もの；(彫像などの) 頭部、頭像；(彗星(すいせい)の) コマ、髪(coma)；=
7 (武器や道具などの先の) 打つ〔突く、切る〕部分、穂(先)、槍先(やりさき)、弾頭、頭；(のみの) 柄頭、冠(かぶら)；(ゴルフクラブ・ラケットの) ヘッド；=
8 (話) (自動車・列車などの) 前灯、ヘッドライト。
9 (河川の) 源、水源；(湾・湖などの) 奥；(高い所にある) 野水池、ダム；=
10 先頭、最前列；前部、先端、突端；=
11 一人、一頭；(heads) (人の) 頭数(あたまかず)、人数；(動物の) 頭数(とうすう)、…頭〔匹〕；〔英〕《集合的》(狐鳥・狐獸などの) 群れ、多数；=
12 頭髮、髪(型)；(シカの) 枝角；=
13 (話) 泡、あぶく；=
14 (深刻な 事態の) 頂点、危機、クライマックス、山場；=
15 (膿瘍(のうよう)・ねぶと・にきびなどの今にも破裂しそうな) 化膿部分、頭；=
16 (通例、地名で) 岬；=
17 (車などの) ほろ、覆い(hood)；〔英〕(自動車の) 屋根。
18 (1) (通例 heads) 《単数扱い》(コイン・メダルなどの) 表(←tail)；=
(2) (頭像の描かれた) 郵便切手。
19 (文章や演説などの) 要点、論点；(主要な) 項目；=
20 【植物】
(1) 頭花、頭状花。⇨ INFLORESCENCE (図)
(2) たま；(キャベツ・レタスの) 葉の結球、(セロリの) 葉柄の塊、(カリフラワーの) 花芽の塊。
21 (米俗)
(1) (しばしば複合語) (特に LSD やマリファナの) 麻薬常用者、麻薬中毒患者；(麻薬による) 社会の落後者；(麻薬による) 陶酔感、幸福感；=
(2) (通例複合語) …ファン〔狂、マニア、キチ〕；=
22 (heads) 【蒸留】初留(液)；蒸留の初期に留出するアルコールの含有液。cf. TAIL' n.16.

- 23 =headline.
- 24 【海事】
- (1) 船首。
 - (2) 四辺形の帆の上端。
 - (3) 三角帆の上端。⇒ SAIL (図)
 - (4) マストの円材上端の二重の部分。
 - (5) マストの上端の静索から上の部分で、頂上の木の玉まで。
 - (6) =crown 17.
 - (7) 《the head, しばしば heads》《俗》(船の) トイレ, 便所 (▶ 船首にあるからというのが, bulkhead (隔壁) の短縮形ともされる); (一般に) トイレ。
- 25 【文法】主要語【部】。
- (1) 内心構造 (endocentric construction) において, 構造全体とほぼ同じ形式類 (form class) に属し, ほぼ同じ文法的役割を果たす語【部分】。
 - (2) 修飾語や限定詞に対して, 修飾・限定される語: 句の中心を成す語【部分】; 例えば former presidents では presidents が主要語, former が修飾語。
- 26 【採鉱】(炭層中の) 坑道, 水平坑道, 先進坑道。
- 27 【機械】
- (1) (旋盤・ボール盤などの) 工具を取りつける部分: 板ばねの取りつけ端。
 - (2) シリンダーの閉鎖面。
- 28 【鉄道】=railhead 3.
- 29 蒸気【水】圧: =
- 30 【水力学】水頭 (すいとう)。
- (1) (水など) 流体中の2点の高度差。
 - (2) これによって生じる圧力差を高度差で表したものの。
 - (3) 流体の圧力を, 同じ圧力をもたらず流体の高さで表したものの。
- ▶ pressure head ともいう。
- 31 【電子工学】(テープレコーダーなどの) ヘッド (magnetic head)。cf. ERASING HEAD, PLAY-BACK HEAD, RECORDING HEAD
- 32 【コンピュータ】=read/write head.
- 33 【写真】
- (1) 雲台・三脚の上に取りつけカメラを支える台。
 - (2) 引伸機頭部: 光源, ネガキャリア, レンズボード, レンズの総称。
- 34
- (1) 【印刷】天, 頭: 印刷ページの上部余白。
 - (2) 【印刷】柱: ページの上部余白に記された章名, 節などの一行見出し。
 - (3) 【製本】天, 頭: 化粧裁ちされた上端の切り口。
- 35 【音楽】符頭: 音符の卵形の部分。
- 36 【金工】(鋳塊鋳型の) 押し湯・鋳物が凝固収縮する際に溶湯の補給をする余分の溶湯。
- 37 【建築】上枠: ドアや窓など開口部の額縁の上枠。
- 38 《話》(a head) 二日酔い: (二日酔いによる) 頭痛: =
- 39 《米俗》口: =
- 40 《鞍(くら)の》前橋, 鞍頭(くらがしら) (pommel)
- 41 《卑(=)》龟头, かりくび; 勃起(ぼつき)した陰茎。
- 42 《俗(卑=)》フェラチオ, 「尺八」; 《時に》クニニリングス: =
- 43 《古》(反乱などで徐々に増大する) 力, 勢力。
- adj.
- 1 (地位・身分・階級などが) 第一(位)の, 最上位の, 先頭の; 主要な: =
 - 2 《しばしば複合語》頭(部)の, 頭のための: =
 - 3 《しばしば複合語》上部【上端, 前部, 先端】にある: =
 - 4 船首の方向からの, 前方からの: =
 - 5 《俗》麻薬の【に関係のある】。

—v.t.

- 1 …の最上位【最前部, 筆頭】を占める, 首位【先頭】に立つ: =
- 2 《競争などの》先頭【優位】に立つ, (相手を) しのぐ: =
- 3 《組織・団体などを》率いる, 主宰する, …のかしら【長, 盟主】である《(up)》: =
- 4 《乗り物などを》(…の方向へ) 向ける: =
- 5 《川・湖などの》水源を(横切らずに) 迂回(うかい)していく。
- 6 …に頭【頭部, 先】をつける: =
- 7
- (1) …の頭(部)を取り去る【切る】, 首を切る: =
- (2) 《木の》こずえ【枝先】を切り落とす: =
- 8 【キツネ狩り】(キツネを) (逃げて行こうとするコースから) 脇道(わきみち)に追い込む, そらせる。
- 9 …の前に立ち向かう: =
- 10 …に見出し【標題】をつける, (手紙などに) (日付・住所などを) つける《(with…)》: =
- 11 【サッカー】(ボールを) ヘディングする。

—v.i.

- 1 (ある地点へ) 前進する, 向かう《(for, toward…)》: (ある方向へ) 進む, 向きを変える: (ある事態の方へ) 進んでいる, 進行している: =
 - 2 頭(部)ができる, 球状になる, 結球する, (腫(は)れ物が膿(う)んで) 頭ができる: =
 - 3 《主に米》(河川が) (…に) 源を発する: =
- [900年以前。中期英語 he(v)ed, 古期英語 heafod; ラテン語 caput (←CAPITAL) と同根]

head・like

—adj.

〔ランダムハウス英和大辞典〕(第2版) 小学館

かお【顔】

一 〔名〕

- 1 頭部の前面。目・口・鼻などのある部分。つらおもて。「毎朝―を洗う」
- 2 かおかたち。かおだち。容貌（ようぼう）。「彫りの深い―」
- 3 表情。かおつき。「浮かぬ―」「涼しい―をする」
- 4 列座する予定の人。かおぶれ。成員。「常連が―をそろえる」
- 5 社会に対する体面・名誉。「―をつぶされる」「合わせる―がない」
- 6 一定の社会・地域における知名度、勢力。「あの店では、なかなかの―だ」
- 7 ある組織や集団を代表するもの。また、目立つ部分。「首相は日本の―だ」
- 8 物の表面。姿。「月が山の端に―をのぞかせる」

二 〔接尾〕(多く「かお」の形で) 動詞の連用形などに付いて、そのような表情、またはそのようなようすであることを意を表す。「心得―」「したり―」「人待ち―」「得たり―」

- 顔(かお)が合わせられ□ない
 - 顔(かお)が売(れる)
 - 顔(かお)が利(く)
 - 顔(かお)が立(つ)
 - 顔(かお)が潰(つぶ)れる
 - 顔(かお)が広(い)
 - 顔(かお)から火が□出る
 - 顔(かお)で笑って心で泣(な)く
 - 顔(かお)に書(か)いてある
 - 顔(かお)に出(で)る
 - 顔(かお)に泥(どろ)を塗(ぬ)る
 - 顔(かお)に紅葉(もみじ)を散(ち)らす
 - 顔(かお)を合(あ)わせる
 - 顔(かお)を売(う)る
 - 顔(かお)を貸(か)す
 - 顔(かお)を曇(く)める
 - 顔(かお)を拵(こしら)へる
 - 顔(かお)を揃(そろ)へる
 - 顔(かお)を出(い)す
 - 顔(かお)を立(た)てる
 - 顔(かお)を繋(つな)ぐ
 - 顔(かお)を潰(つぶ)す
 - 顔(かお)を直(なお)す
 - 顔(かお)を振(ふ)る
 - 顔(かお)を見(み)せる
 - 顔(かお)を汚(よご)す
- 『デジタル大辞泉』 小学館—n.

face

—n.

I 顔。

- 1 顔：＝
- ＝
- 2 〔米方言〕口。
- 3 表情としての顔、顔つき、顔色：＝
- 4 しかめっつら、あざけり顔、不快そうな顔：＝
- 5 〔通例 the face〕(話) (…する) 厚かましき、ずうずうしき、涼しい [平気な] 顔 (to do)：(しばしば a face) 自信、確信：＝

6

- (1) 有名人、著名人、顔役。
- (2) 〔俗〕やつ、野郎；人：＝
- (3) 〔黒人俗〕白人。
- (4) 〔英俗〕人中で目立つ人；流行をつくる人。
- (5) 〔英俗〕(呼び掛け) あんた、きみ。
- 7 面目、面子、体面、威信 (prestige)
- ▶中国語「面子」「臉」の翻訳借用：lose FACE: save FACE: =
- 8 〔米俗〕侮辱：＝
- 9 (特に苦境において) 威厳を保った) うわべ、見せかけ：＝

II 前面。

- 10 (建物などの) 正面、前面、表 (facade, front)：『建築』見付き、見付け；(時計の) 文字板。
- 11 (織物・なめし革・紙などの) 表側；(証券・手形などの) 額面、券面；(書類の) 文面；(トランプの) 表；(開いた本の) ページ面：＝
- 12 〔採鉱〕切羽(きりは) (working face)：鉱石・石炭などの採掘現場：＝
- 13 (道具などの) 使用面、金槌(かなづち)・ゴルフクラブなどの) 打つ面、フェース、(ナイフの) 刃(の部分)。
- 14 〔印刷〕

- (1) (活字・版の) 面、字面。⇒TYPE (図)
- (2) (活字の) 書体、字体 (typeface)：＝
- (3) 字幅：＝
- ▶(2)、(3) で typeface ともいう。
- 15 〔海事〕【航空】面、圧力面、フェース (↔ back)：プロペラの翼の後面。
- 16 〔築城〕稜堡(りょうほ)などの突出した外向斜面。⇒BASTION (図)
- 17 〔電子工学〕=faceplate 3.
- 18 〔古〕面前、人前；見えるところ：＝

III 表面。

19

- (1) 化粧品、化粧：＝
- (2) 仮面、お面。
- 20 外観、外見、様子、様相：＝
- 21 (土地・岩などの) 表面；(山・崖(がけ)の) 切り立った面：＝
- 22 (地表の) 地理的な特徴、地勢。
- 23
- (1) 〔幾何〕面。
- (2) 〔結晶〕面：＝
- 24 〔アイスホッケー〕=face-off 1.
- 25 〔トランプ〕=face card 1.

—v.t.

- 1 …の方 [方向] へ向く、と向き合う、…に面している：＝
- 2 …を(…の方へ) 向かせる (toward…)：＝
- 3 …に直面する、向かい合う、取り組む；(しばしば受身) (…に) 直面させる (with…)：＝
- 4 …の可能性 [危険性] が強い：＝
- 5 …に勇敢に [大胆に、ずうずうしく] 立ち向かう (down, out)；対抗する：＝
- 6 (しばしば受身) (建物の前面の壁などに) (…で) 上塗りする、上張りする；表面を覆う (with)：＝
- 7 (衣服などに) (…で) 飾りをつける (with…)：＝
- 8 (石などの) 表面を化粧する、仕上げる (off)；(茶などを) 着色する (up)；…の最上部に粒揃いの果物を並べる cf. FACER 4.

9

- (1) <トランプの> 表を出す。
- (2) <手紙を> (スタンプを押し分けができるように) 表を上にしてそろえる。
- 10 <軍事> (兵士を) 方向転換させる (右向け、左向け、回れ右など) (about)：＝
- 11 〔アイスホッケー〕(審判が) <バック (puck) を> フェースする、相対する2人の選手の間に投げ込む。
- ▶このバックを2人が取り合って競技が始まる。

—v.i. (v.t.)

- 1 向く (to, toward)：＝
- 2 <建物などが> …に面する (on, to, toward…)：＝
- 3 <主に米> 〔軍事〕方向転換する (右向け、左向け、回れ右など) (about)：＝
- 4 <アイスホッケー> <審判が> フェースする (off)。

cf. v.t.10: =
[c1290. (名詞) 中期英語<古期フランス語<俗ラテン語*facia (ラテン語facies「外見、顔 (FACIES)」)に相当)。主要な人体語はゲルマン語に由来するが、faceだけがフランス語から借用された]

face · able

—adj.

『ランダムハウス英和大辞典』(第2版) 小学館